

2023 年度 東京福祉大学 特別選抜 7 期・編入学 7 期

東京福祉大学短期大学部 特別選抜 7 期

(出願期間 2023 年 3 月 6 日～3 月 15 日)

小論文課題 課題文

※無断転載・複製を禁ず

次の文章を読んで、内容を要約した上で、あなたの考えを 600 字から 800 字で述べなさい。
※作成にあたっては、本学所定の「小論文課題 解答用紙」を使用すること。

校則の見直し 子どもと教員の対話から

下着の色を指定する。頭髮の地毛証明を提出させる。こうした理不尽な校則をなくすきっかけにしたい。

文部科学省は教員用の「生徒指導提要」を12年ぶりに改訂する。小中高生の生活指導や問題行動への対応に使う手引書である。

改訂版は子どもの主体性を育むことを重視し、生徒指導を「自分らしく生きられるように成長過程を支える教育活動」と定義した。国連の子どもの権利条約に触れ、人権を基本に据えている。

特に校則については、守らせることにこだわる発想を戒め、子どもと共に考える必要性に踏み込んだ。

まずは教員が、校則ができた背景を認識する。子どもに理解を促し、自主的に守るよう指導する道筋を示した。必要な理由を説明できない校則は絶えず見直す。

子どもの意見を反映させることを何より歓迎したい。自分たちが守るべき校則の是非を話し合い、見直しにも関わる。文科省は「身近な課題を自ら解決するといった教育的意義を有する」と説明している。その通りだろう。

校則を学校のホームページなどで公開し「見える化」することも求めた。外部の目に触れる意義は小さくない。

不合理な校則が社会問題となり、教員の意識も変わってきた。一方で「子どもに自由を認めると生活が乱れる」との管理意識も根強い。改訂版を浸透させるには、学校現場全体でさらなる意識改革が欠かせない。

子どもの意見をどう反映させるか。ただ子どもの言う通りにすれば主体性が育めるとは言い切れない。教員と子どもが校則の背景を共有し、妥当かどうかを議論すべきだ。そもそも校則が必要なのかも話し合ってもらいたい。この過程は教育そのものである。

結論に時間を要する場合もあるだろうが、対話を重ねることで校則違反や問題行動が減る効果が期待できる。地道に取り組んでほしい。

提要が改訂されるまでの12年間で子どもを取り巻く環境は大きく変わり、新しい課題が加わった。LGBTQなどの性的少数者、家事や家族の世話を担うヤングケアラー、生活支援が必要な困窮家庭の子どもたちへの対応だ。

「チーム学校」という考えも示された。教職員を中心に心理や福祉、法律の専門家、地域の人たちが協力して課題に向き合う。多様な背景を持つ子どもが増えており、有効な取り組みと言える。

「不適切な指導」の具体例が盛り込まれたことは評価したい。教員の行き過ぎた叱責や思い込みによる誤った指導が原因で、自殺した子どもたちがいる。遺族の会が「指導の基準が明確になれば、防げる不登校や自殺がある」と要望していた。

提要は日常的に活用されていないとの指摘がある。現場で効果を発揮するには教員の研修と検証が欠かせない。

出典：西日本新聞 2022年9月24日「社説」